


 書評

Henry J. Jackson, Patrick D. McGorry 編, 水野雅文, 鈴木道雄, 岩田仲生 監訳

早期精神病の診断と治療

樋口輝彦

臨床病期モデルを採用した早期精神病治療の良書

本書は 1999 年に刊行され、わが国では 2001 年に邦訳された「精神疾患の早期発見・早期治療」(金剛出版)の改訂版「Recognition and Management of Early Psychosis: A Preventive Approach」の日本語版(邦訳タイトル「早期精神病的診断と治療」)である。編集は初版と同じく、Henry J. Jackson 教授と Patrick D. McGorry 教授によるものであるが、その執筆者はほとんど入れ替わっており、この領域の研究の進歩がいかに早いかを実感させる。

本書は 8 部で構成されている。第 1 部(第 1 章, 第 2 章)は導入部であるが、この中で早期精神病的予防と介入にとってきわめて重要なモデル、すなわち「臨床病期モデル」が詳しく解説されており、まず、この部分を十分理解することが、本書全体の理解の前提になる。第 2 部(第 3~5 章)では、精神病的リスクと脆弱性に関する幅広く重要な分野が検討されている。第 3 章は精神病的遺伝研究分野の最新知見を概観し、第 4 章では精神病的環境的危険因子と遺伝要因の相互作用がレビューされている。また第 5 章では早期精神病的を対象にした神経生物学的研究が概観されている。

第 3 部(第 6 章, 第 7 章)は第 4 部と並んで、いわば本書の中心的課題すなわち「予防と早期介入」を扱った中核の部である。第 6 章では ARMS の同定と治療、初回エピソード精神病的(FEP)への移行の予測を扱っている。第 7 章は ARMS として同定された人たちが持つ、幅広い症状と機能的困難さを扱う介入を包括的に概観している。この章では、私が ARMS に関して最も知りたい点、すなわち ARMS というレッテルが生み出すかもしれないスティグマ

への対処、「偽陽性」に対する不要な治療の回避、ARMS への介入期間の問題などが取り上げられており、注目されるところである。第 4 部(第 8~10 章)は精神病的の同定とサービスへのアクセスの改善、精神病的未治療期間(DUP)と転帰の関係を論じている。第 5 部(第 11~13 章)は FEP や躁状態の患者に対する包括的な評価方法と治療の提供について、第 6 部, 第 7 部では「臨界期」が扱われている。

本書が扱う早期介入というテーマは特に新しいものではない。かつて、多くの研究者、臨床家が研究、報告し啓発もしてきた。何がこれまでと違うのか? それが本書を読むうえで最大の関心事であった。その答えは 2 つのキーワードにまとめることができたように思う。その 1 つは「下位診断群」の分類における「FEP(初回エピソード精神病的)」を研究対象にした点であり、2 つ目は「臨床病期モデル」の導入である。特に、「臨床病期モデルは早期の有効な治療は予後を改善し疾患のより重篤な病期への進行を予防する可能性を示唆している」と編者らが本書の概観の中で述べているこの言葉で、本書を刊行した方々のこの研究に取り組む原点を理解できたように思った。ただ 1 点、私の中で解決できない疑問が残った。それは M. Bleuler の有名な経過と予後の図の中の急速荒廃型と急速欠陥型を臨床病期モデルの中でどのように位置づけ、理解すればよいかという点である。

最後に 400 ページにも及ぶ大著を邦訳された訳者の方々、監訳に当たられた水野雅文、鈴木道雄、岩田仲生の 3 名の教授に心からの敬意を表したい。

(国立精神・神経医療研究センター)

●B5 432 頁 2010 定価 9,450 円(本体 9,000 円+税) 医学書院